

\*\*\*\*\*

## 北海道大学総合博物館

No.29

# ボランティア ニュース 2013.6

\*\*\*\*\*

### 特別寄稿

中谷宇吉郎先生小伝 ⑥(最終回) 海外における雪氷研究の展開—グリーンランドとマウナ・ロア—

名古屋大学名誉教授 樋口 敬二

この連載の①で紹介した石川県加賀市にある「中谷宇吉郎 雪の科学館」の中庭には、グリーンランド氷床のモレイン(氷堆石)の石が敷かれている。デンマーク政府の協力によって北緯 78 度の極地から運ばれてきた 60 トンの石の原の上には、中谷芙二子さん(次女)の修景による“人工霧”が舞い、その後方に柴山淵と白山が望まれる。中谷先生がグリーンランドの内陸基地 Site-2(サイト・ツウ:北緯 77 度)で研究されたことを記念して作られた。

戦後になると、中谷先生は研究の舞台を、アラスカの氷河、グリーンランド、ハワイの火山へと広げられ、なかでも大陸氷床の表層付近で起こる積雪の氷化過程に関する研究のためには、病身をおして、毎夏のようにグリーンランドにおもむかれ、それを、親友の茅 誠司先生は、「グリーンランドと命のやりとりをしたように、私には思われて残念でならない」と嘆かれた。

そこで、私には思い出す次のようなエピソードがある。

1956 年 12 月、中谷先生は、ハワイのマウナ・ロア火山の山頂近くの観測所(海拔 3,385m)で雪の結晶の観測をされたが、その翌年に今度は積雪研究にグリーンランドへ行かれるために、ハワイで入国手続きをされた際、担当したのが、偶然、前年と同じ管理官であった。彼は中谷先生がマウナ・ロアの山頂に滞在したことを知っていたので、「今年はどこへ行くのか?」と訊ねた。そこで先生が「グリーンランド」と答えると、彼は目を丸くして叫んだ。“Can't you find better job?”

先生曰く、「アメリカ人のことだからネ、“このじ

いさん、その年でそんな所にまで出稼ぎに行かなきゃならないのか、可哀そうに”と同情して“オイ、もっとましな仕事は見つからないのか?”とやってくれたんだらうが、傍にいた女房は意味が判らなくてポカンとしているのに、三代子(三女)は判って、キヤーキヤー言っで喜んでいたよ。」そう話された中谷先生の嬉しそうな笑顔を思い出すと、胸が熱くなる。

ところで、中谷先生がグリーンランドに行かれるまでの経緯については、東 晃著『雪と氷の科学者・中谷宇吉郎』(北海道大学図書刊行会、1997)に詳しく書かれているが、先生が参画してシカゴ郊外のウイルメットに作られた新しい雪氷凍土研究所(Snow, Ice and Permafrost Research Establishment: SIPRE)に、先生は 1952 年に招かれて、2 年間滞在し、アラスカのメンデンホール氷河で採取された氷の巨大単結晶の研究をされた。先生の言葉を借りると、「約 1 トンの氷の単結晶を使い、3,000 枚の写真と 250 枚のカーブをとって」進められた氷の単結晶の塑性変形などの力学的性質、内部融解によるチンダル像の形成などに関する成果は大部の英文の研究報告書として刊行されている。

一方、1957 年からは日本の南極観測の発端となった国際地球観測年(International Geophysical Year: IGY)として世界の各地で様々な国際的共同観測が実施されたが、北極ではアメリカがデンマークの協力を得て、グリーンランドに基地を作り、IGY の数年前から大陸氷床を横断する雪氷調査を進めており、その主力を担ったのが SIPRE であった。そこで、中谷先生もグリ

ーンランド氷床での SIPRE の研究基地 Site-2 で、氷床表面における積雪から氷河水への変化などの観測をされたが、その経緯は「白い月の世界」(中谷宇吉郎紀行集『アラスカの氷河』(岩波文庫、2002)所収)に述べられている。

また、1959 年9月には、先生はグリーンランドの帰途、北極海に浮かぶ氷島 T-3 を視察し、「極北の神秘・氷島」(『アラスカの氷河』所収)を書いておられるが、その翌年に私も六車二郎君とともに、T-3 での観測に参加した(「北極に浮かぶ氷島」(樋口敬二著『氷河への旅』(新潮選書、1982)所収;六車二郎「北氷洋の氷島」I『自然』1961年8月号、II『自然』9月号)。

一方、中谷先生の海外における研究としては、ハワイ島のマウナ・ロア火山山頂における観測があり、その経緯は「黒い月の世界」(『アラスカの氷河』所収)に次のように述べられたように、人工雪の実験に端を発している。

「結晶の形は、できる時の気温と、水蒸気の過飽和度と、この二つの要素できまるが、(中略)、いま一つ隠された要素があって、それが二次的に、結晶形を支配しているらしく、どうも大気中の極微な塵、凝結核ではないかと思われてきた。それで凝結核をとり去った「純粋な空気」を作り、それを低温室に設置した人工雪の装置に送って、その中で雪の結晶を作ってみた。そしたら結晶の形がまるで違うという意外な結果が得られた。したがって、どこか世界中でいちばん空気のきれいなところを選んで、そこに降る雪の形を調べてみるのが、必要になってきた。それで選ばれたのが、マウナ・ロアの山頂である。」

この凝結核に水蒸気が凝集して出来た微水滴が雪の結晶の成長に果たす役割については、1956 年、花島政人先生と六車二郎君によって実施された実験によって明らかにされた。『雪氷(中谷宇吉郎博士追悼特集)』(1962 年9月)に花島先生が書かれた「中谷先生の業績—雪の結晶」に、「過冷却微水滴の挙動については、氷面の映画による顕微鏡観察が行われ、粒は氷面を跡をつけながら滑り走り、或いはころがり、結晶に付着し成長させるという機構が明らかにされた。」という成果が述べられている。

そんな研究に基づいて行われたのがマウナ・ロア山頂における雪の観測で、中谷先生と同行

したのは、菅谷重二、荘田幹夫という中谷門下の先輩達で、若輩の私はハワイ観測について講演される先生のお伴をしてスライド係を務めた。そして、何度も同じ話を聞いたため、内容は勿論、聴衆を笑わせるところまで覚えてしまい、「先生、代役が務まりますよ」と申し上げたほどであった。

そんな思い出のある私にハワイ島を訪れる機会が先生の観測から 40 年後の 1997 年にやって来た。当時国立天文台はハワイ島のマウナ・ケア火山の山頂に大型光学赤外線望遠鏡「すばる」を建設し、国立天文台ハワイ観測所が正式に開設の運びとなり、6月12日、ヒロ市にある観測所本部で記念式典が行われた。この時、私は国立天文台評議員会の副会長をしていたので、式典に招待され、喜んで参列を決めたが、その心の隅には、「すばる」の見学とともに、マウナ・ケアの山頂から中谷先生観測の地マウナ・ロアを遠望できるという楽しみがあった。

そこで、ハワイ島における日本人科学者による研究のパイオニアは中谷先生であることを日米や諸外国の研究者達に知ってもらうために、観測所に記念品を贈呈したいと考えた。記念品としては、先生の著書『黒い月の世界』(創元社、1958)と『中谷宇吉郎 雪の物語』(中谷宇吉郎雪の科学館、1994)を持参することにしたが、本だけでは書棚に収まってしまうと、目につかなくなる。そこで思い付いたのが、マウナ・ロア山頂における中谷先生の写真と観測に関する先生の言葉の色紙を一つに収めた額を作って贈呈し、観測所の所長室に飾ってもらうことである。

色紙の言葉としては、『黒い月の世界』から「マウナ・ロアの山頂は針の天国である」を選んだ。世界一空気がきれいな処と言われるハワイの高山に降る雪の多くが針状結晶であることを見出した中谷先生の喜びがこの言葉にこめられているからである。

額の作製については、樋口敬二「ハワイの宇吉郎—観測 40 年記念の旅」(『中谷宇吉郎 雪の科学館 通信』第5号、1998.3.31)に書いたように、いろんな工夫を重ねたが、そのような準備をしてハワイを訪れたため、記念式典では式次第に私の挨拶を入れて下さった。そこで、中谷先生の業績を紹介し、額と2冊の本を海部宣男観測

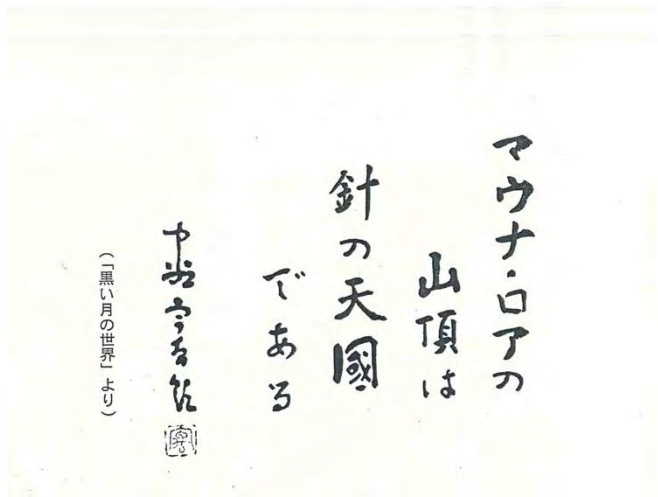


所長(当時)に手渡した。幸い出席者の間では好評で、その後の懇親会でも話題になったので、私のハワイ行が、観測所の開設を祝うとともに、中谷先生のハワイ観測40年を記念する旅であるように思われたのである。

中谷先生は『西遊記』がお好きだった。シルクロードに憧れ、その地を訪れることは果たされなかったが、ハワイの火山、グリーンランドの氷床

と、『西遊記』さながらの世界を楽しまれた。そこで、私が「20世紀の孫悟空ですね」と申し上げると、ニヤニヤとされて、「まだ、人工衛星があるよ」と答えられた先生の笑顔が懐かしく浮かんで来る。まさに、先生のお好きな“規模雄大”という言葉のとおり、地球全体をめぐる研究活動であった。

(2013年5月2日記)



国立天文台ハワイ観測所に贈呈した色紙(『中谷宇吉郎 雪の科学館 通信』第5号より)



著者影像(右) ハワイ観測所にて、海部宣男観測所長(左)とともに。

## 樋口敬二氏紹介

1927年朝鮮府木浦で生まれ、京都市で育つ。旧制三高時代から中谷宇吉郎の「雪」を愛読。1949年中谷門下となるため、北海道大学に進み、中谷教授から親しく指導を受ける。大学では降雪現象を研究。気象学会賞受賞。1966年名古屋大学教授となり、雪氷学の広い分野に研究活動を広げ、71年日本雪氷学会賞。「ネパールヒマラヤの氷河学術調査」では指導的役割を果たし、多くの研究者を育成。1991年名古屋大学水圏科学研究所長。93年紫綬褒章受章、1993年～2005年名古屋市科学館館長。名古屋大学名誉教授。



初夏の札幌市企画歴史と文化の八十八選「人工雪誕生の地」碑 北大構内にて編集委員星野フサ撮影



北大旧理学部(現総合博物館)教授室 N123 室に復元された中谷宇吉郎研究室 編集委員星野フサ撮影

## 企画展示「北のすみれ」開かれる

研究部教授／植物体系学 高橋 英樹

標記展示を本年4月16日から5月12日まで1階の「知の統合コーナー」で開催しました。展示の主要部分には本館植物ボランティアの船迫さんによる実寸大のスマレの植物画でした。さらに、スマレの押し葉標本や図譜類、北海道の地理分布図、日本と北海道のスマレ属植物リストや北海道のスマレのカラーライドショーなども用意しま

した。またオープニングセレモニーではチェンバロボランティアの新妻さんや学生の長竹さんにすみれの歌曲を披露頂きました。

今回の企画展示にあたっては展示準備や展示室運営、撤収などにおいて博物館のボランティアの方々に大きな援助を頂きました。お力を貸して頂いた全ての方々に感謝申し上げます。

## Le violette ～ 北のすみれ展に寄せて歌う

チェンバロボランティア 長竹 新(北海道大学農学部4年)

今年の春は長いこと雪が残り、天気もすぐれず、ゴールデンウィークを過ぎてようやく春が来たなと感じております。そんな遅い春のなか、北大総合博物館では4月16日から5月12日の間、企画展示「北のすみれ」が開催されていました。

今回、「北のすみれ」展の開催に際し、「スマレにちなんだ曲を一曲」という事で、このオープニングセレモニーにおいて、チェンバロボランティアより私(歌)と新妻 美紀さん(チェンバロ)による演奏の機会を頂きました。今回演奏した曲は Alessandro Scarlatti 作曲の、その名も“Le violette”(スマレ)です。作曲者の A. Scarlatti はバロック音楽の時代活躍したイタリアの音楽家です。また、北大に展示してあるポプラチェンバロもイタリアン様式という型に作られており、これもまたバロック時代に活躍した楽器です。まさに、時代と国がうまく重なっており、当時 Scarlatti もこのようなイタリアンチェンバロでこの曲を書いたのだろうかと思いが膨らみます。

実は恥ずかしながら、今回開かれた「北のすみれ」展を見るまで「スマレは紫」というイメージが強かったのですが、他にも黄色や白などのかわいらしいスマレがあるのです。そして、スマレには「小さな愛」や「誠実」、他にもそれぞれの色に「貞節(紫)」「謙遜(白)」、「慎ましい喜び(黄)」などの花言葉があります。今回歌ったこの“Le violette”にもキリスト教の伝統の中で、神の子として生まれながら、自らを低くしたイエスの

「謙遜」のイメージが込められているとされています。かわいらしくも、背や花が小さく、一見目立たないスマレの姿にそのイメージを抱いたのかもしれませんが。

最後になりましたが、この歌の歌詞と訳を紹介させていただきます。これまでもしばしば企画展との内容をモチーフにした演奏をさせて頂いた事がありますが(蝶や海藻)、今後もこのような形でより博物館ボランティアの活動を充実させて行ければと思います。

*Rugiadose, odorose violette graziose*  
露に濡れ、香るかわいらしいスマレよ  
*voi vi state vergognose*  
お前たちは恥じらい、  
*mezzo ascose fra le foglie*  
草の間に身を隠して  
*e sgridate le mie voglie che son tropp' ambiziose*  
あまりに野心に満ちた私の望みを怒っている



Le violette を演奏する新妻さんと歌う筆者。実は、練習では毎回失敗していたため、とても緊張しながらの本番でした(笑)



私の生まれは1942年3月、小樽の住吉。吉江の吉は住吉神社の吉。4歳から中学までは豆の国、十勝の自然の中で育つ。わざわざ野の花を見に行くこともなく、花を画いたこともなく、ないはずくめ。東京での学生時代は学生運動には目もくれず、ノンポリと揶揄されながらも哲学書や中世の古文書を学び、古書店めぐりと食べ歩き下駄をはいて、路面電車でめぐるおとぼけな日々。二度の臨死体験をしてから専業主婦になった。家事に追われて深呼吸したくなり、初めて野山の花を意識したことが植物画に出会う切っ掛けになった。一年で3枚くらい描いたコジマエンレイソウとテンナンショウが何故か国立科学博物館のコンクールで入選した。その後、1993年3月、「よく生きた！」自分の誕生祝いをかねて、「野の花と遊らら」を道銀のギャラリーで行った。すると、道新の方が「三越デパートの広告に借りたい」といわれた。それで、ハマナス、オクトリカブト、ニオイスマレを提供、道新の1ページに掲載された。これがなんだか分からない、一つ目の冥利。

1992年、日本植物画倶楽部が発足した。当初から会員として活動に参加。2003年、「日本の絶滅植物図譜」を発行。国内4か所を巡回したあと、2005年3月、アメリカで原画展をする機会を頂いた。それと同時に、「私のすみれ」を自費出版し、出来たばかりの本を持ってその日の午後アメリカに旅だった。ワシントンDCの国立樹木園とシカゴ植物園での6か月に亘る巡回展に参加した。はからずも、シカゴの植物園広報紙にオオバタチツボスマレが掲載された。これが二つ目の冥利。

この前後から、毎日画を描いても心地よくなり、ワクワクするようになった。特に植物の解剖と小さい顕微鏡でスマレの柱頭の形の系統を知り資料を作る。そのうえで、下画を作る作業が一番楽しくなった。植物のあれこれを知りたくなったら、面白くて止まらない日がやって来た。すみれを描くにあたり柱頭の形の他に根の形状について記録した。彩色にはそれほど時間を要しないが葉の表現が一番難しい。生命の表現の要だと

思っている。種から育てるときは忍耐と喜びがひとしお大きい。

2012年度、北方山草会は30号を記念して「スマレ」を特集することになった。恐れ多くも、これまで画いたことのないタイプ標本に挑戦してみたいと思い、高橋英樹先生にご相談したところご承諾頂き、樺太のスマレ2種、千島のスマレ2種を画にすることが出来た。画にするにあたっての詳細は画と文章で会誌にまとめた。この時点で、先生から「他にスマレの画はないか」と問われ、企画展「北のすみれ」がスタートすることになった。これが三つ目の冥利。



高橋教授の隣で「キスマレ」の説明をしている筆者

2013年4月16日から5月12日まで、企画展「北のすみれ」は開催された。企画展のコンセプトは日本の中での北のスマレを展示するとともに、北海道ばかりか樺太、千島を含む三角関係を明示し、現在容易には行かれない地のスマレに思いを馳せるということもあった。北海道・樺太、北海道・千島、そして北海道と樺太・千島に自生するスマレの整理をしてみました。その他、シレットコスミレの学術的研究、シカの食害の報告、ツボスマレなどの花粉の画像の展示、選りすぐりの植物標本の展示、見たことのない高価な本の展示等々、これらのことは、高橋先生のお力添えと博物館だからこそ出来たことです。期間中の来館者の中には将来植物学者になりそうな小学生、現在植物学者の方がタイプ標本の画に大興奮されたり、樺太生まれの方からイワマタチ

ツボスミレをお浸しで食べた話等々。すみれは何故か日本人が好きな植物です。花が咲き始める一足先に先生のお誘いで企画展を実現することが出来ました。

オープニングセレモニーでチェンバロと堇の歌をはじめ、会期中は多くのボランティアの方々に

ご協力いただきました。皆様のお力添えに感謝申し上げます。これからも植物を美しく表現できますように、科学と美が融合昇華したものとなりますように努力してまいります。有り難うございました。

## 活動報告

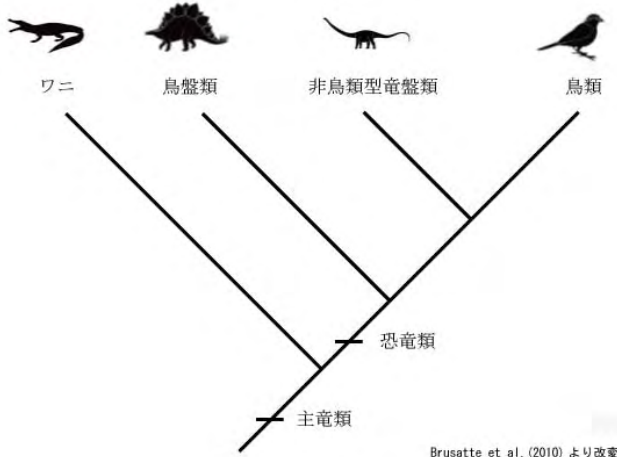
### CISE (チセ) ネット

化石ボランティア 古井 空(北海道大学理学院修士2年)

CISE ネットとは北海道大学総合博物館を中心に札幌圏の教育施設が協力して“モノ”に触れて学ぶ教育を推進することを目的とした組織です。CISE ネットではひとつのテーマを複数の教育機関で視点を変えながら学ぶことができるため、地域住民が地域への興味・関心を持つ入り口となることから、さらなる理解の深化まで幅広い効果が期待されています。現在このCISE ネットではヒグマ、サケ、セミ、恐竜をテーマに、それぞれで複数の施設がグループを形成しています。私が所属する化石ボランティアは青少年科学館・中央図書館・博物館活動センター・円山動物園と共に小林快次先生の下に組織された恐竜グループで活動しています。

なぜ恐竜グループでワニを題材にするのでしょうか？ヒグマやサケ、セミとは違い、恐竜は大昔に絶滅してしまったため、生きた姿を観察できません。しかし、恐竜には生き残った子孫がいます。鳥類です。鳥類は恐竜の中から進化して生き残ったグループ。そして恐竜と同じ祖先を持つ仲間の中で、現在生きていて最も近いと言われているのがワニです。

ワニと鳥類を知ることで化石だけではわからない恐竜の姿が浮かんできます。そのため今回はワニが題材として選ばれました。



ワニと恐竜及び鳥類の系統関係

施設が協力している例として、2月2日に円山動物園で行われた恐竜グループの活動を報告します。円山動物園ではワニが飼育されていて、ワニの体の構造や生態を知ることで恐竜について理解を深めてもらう目的で一般の人に向けたイベントが行われました。



ワニの骨を観察して、体の部位の違いによる骨の違いを考える子供達

イベントの内容はワニの骨格標本を用いて体の構造を、生きたワニからその生態を学ぶというものでした。ワニの骨格を用いて体の構造を学ぶセクションでは、参加者が4人ずつのグループに分かれ、ばらばらに置かれたワニの骨を何の情報も与えられないままワニの体の形に並べていきました。この作業を通して、体の部位ごとの特徴や骨の1つ1つの形を考えながらモノを観察する力を学んでいただきました。その後、円山動

物園の爬虫類館で飼育員による解説とワニの摂食行動や求愛行動の実演を見学しました。普段はじっとしているワニが活発に動き回る姿にみんな驚いていました。参加者は普段では触れる機

会の少ない骨格標本やワニの生態を目の当たりにして知識を吸収しただけではなく、さらなる学びへの意欲が刺激されたことと思います。

## 総会報告

### 第11回 ボランティアの会総会、講演会および懇親会の報告

会長 在田 一則

第11回ボランティアの会総会および講演会が2013年5月24日(金)16時から総合博物館3階N320教室で、引き続き懇親会がボランティア控室(N314A)で行われました。以下に簡単に報告いたします。



筆者(左)と議事進行役の石川編集長(右)

#### ○総会(16:00~16:40、N320)

総会は19名が出席して行われました。会長の挨拶の後、2012年度活動報告案および2013年度活動計画案の提案があり、承認されました。

#### 1. 2012年度(2012年4月~2013年3月)活動報告

##### (1) 会としての活動

##### 談話会(2回)

6月29日:第24回(大泰司紀之氏:エゾシカは森の幸—エゾシカマネジメントの構築)

11月30日:第25回(江田真毅氏:ナスカの地上絵に描かれた鳥類の同定)

##### 博物館におしかけよう会(4回)

6月2日:第9回(サッポロビール博物館、8名参加)

9月8日:第10回(エドウィン・ダン記念館、13名参加)

10月15日:第11回(小樽みなと資料館、18名参加)

1月26日:第12回(北海道鉄道技術館、19名参加)

##### ボランティア ニュース発行(4回)

6月1日(第25号)、9月1日(第26号)、12月1日(第27号)、3月1日(第28号)

そのほかに、10月9日にボランティア ニュース「中谷宇吉郎小伝」特別号(第24~26号を抜粋編集)、11月13日にボランティア ニュース「中谷宇吉郎小伝」特別号(第24~27号を抜粋編集)を発行し、それぞれ中谷宇吉郎展会場で配布した。

#### その他

5月8日:総合博物館前庭掃除

5月18日:第10回総会・講演会・懇親会

講師:久末進一氏(北大総合博物館図書ボランティア)

演題:ペリーより早く北海道にやってきた大英帝国探検船

DVD「室蘭の夜明け」を上映

#### (2) ボランティアグループ連絡会

原則として、毎月隔週毎に午後1時からN314Aで開催した。

#### (3) ボランティア ニュース編集委員会

適時編集委員会を行った。皆さんの努力により、8ページ立て年4回定期発行が定着。

#### (4) 各グループの活動

植物資料(29名)、昆虫標本(20名)、考古学資料(15名)、地学標本(15名)、メディアボランティア(4名)、化石標本(33名)、北大の歴史展示(3名)、展示解説(17名)、リーフレット翻訳(2名)、平成遠友夜学校(13名)、4Dシアター運営(9名)、チェンバロ展示(19名)、図書室業務(16名)

#### 2. 2013年度の活動方針

##### (1) 各グループの個々の活動

(2) 勉強会(談話会・観察会・博物館へおしかけよう会など)・懇親会を適時開催する。

(3) ボランティア ニュースの発行 4回の定期発行に務める。

#### 3. 2013年度グループ連絡会メンバー

在田一則(会長)・星野フサ(植物)・宮本昌子(昆虫)・



(考古)、寺西辰郎(地学)・(IT)・今井久益(化石)・石川満寿夫(北大の歴史・遠友夜学校)・児玉諭(展示解説)・(翻訳)・(4D シアター)・沼田勇美(図書)・長竹新(チェンバロ)

#### 4. ボランティア ニュース編集委員会

石川満寿夫(委員長)・児玉諭・永山修・沼田勇美・星野フサ・山岸博子

#### ○講演会(16:45~18:15、N320)

講師: 田村麻由美(グリーンケアアドバイザー、(株)ティ・エム社長)

演題: 必ず来るその時のための心の準備について

#### ○懇親会(18:30~20:30、ボランティア控室(N314A))

講師の田村麻由美さんにもご参加いただき、12名が参加して楽しく歓談しました。

## ボランティア総会講演会報告 必ず来るその時のための心の準備について

ボランティアニュース編集委員長 石川 満寿夫

従来の講演会とは趣きを変えて、多少重いことは承知の上で、昨今取り上げ始められている人生の終わりについて考えるテーマを選んだ。一級葬祭ディレクター、一級グリーンケアアドバイザーの田村 麻由美氏を講師に迎え、葬儀までの準備、葬儀後の心のケアを含めて実際の経験を踏まえた解説を拝聴した。講師自らが40歳前後の実兄を交通事故で失った辛い経験からこの道を究めることを選んだとのこと。

昨年、テレビにもしばしば登場していた流通ジャーナリスト金子哲雄氏が41歳の若さで亡くなり自らが余命宣告を受けてからの『心の準備、命の始末』と向き合ったことで年齢を問わず誰にもいつでも起こり得るものだという認識が高まり『終活』という言葉が世の中に普及し始めている。

人生の節目として結婚式があるが、こちらの準備には自らの主張、希望が種々組込まれ、式にも創意工夫がなされているのに対して、葬式についてはなかなか準備をすることはなかった。そして葬儀には自らはいないことから残された身内が混乱することがままあるとのこと。核家族化、少子化が進む昨今、本人の意思を明確に生前にしておくことも必要となる。

高齢者が益々元気に過ごせることはよいことではあるが、必ず来るその時の準備をしておくことは必要と痛感した。そして高齢者になればなるほど年金暮らし状態であり、葬儀自体、費用面からも家族葬など簡素な形態を選ぶ傾向が増え

ているとのことである。

首都圏では火葬場の能力の問題から葬儀自体が時間待ち、日数待ちを強いられることが発生している。事情は違うが3.11の震災では止むなく土葬にせざるを得ない状況が生じていた。



田村講師から戴いた『家族へ贈るエンディングノート、私の記録』

私事で恐縮ではあるが、実際面倒を見る両親4名居たが未だ母、義母と残っており、更に自分自身のことも考える年代である。親の住まいが双方離れているため、その時の準備はなおさらひと工夫がいるようだ。田村講師から戴いた『家族へ贈るエンディングノート、私の記録』を書き込みながら、これからどう生きていくべきなのか、どう暮らしていくべきなのか、どう死んでいくべきなのか、元気な今、考えておきたい。

◆編集・発行: 北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員: 石川、沼田、星野、永山、山岸、児玉)

◆発行日: 2013年6月1日

◆連絡先: 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-4706

◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧いただけます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>